

連載 11 阪妻参上

『キネマ旬報』の映画批評は厳しかった。日本映画に対してはとりわけ手厳しかった。作品表の末尾に「興行価値」が書き添えられるのだが、つまらぬ作品だと「添え物」「地方向き」と容赦がない。だが阪妻こと阪東妻三郎主演作は別格である。

たとえば『坂本龍馬』であれば、

阪東妻三郎が「坂本龍馬」の製作を企図して以来幾度か脚色者を変更したが、彼を満足せしむる脚本を得るに至らなかつたため製作が延期せられたと伝えられて居るだけに今度の「坂本龍馬」には多大の興味が伴なつて居た——が接するに及んでその期待は空しく破られた
(山本緑葉「主要日本映画批評」『キネマ旬報』1928年6月11日)

と紹介を始めておきながら興行価値については「鼠小僧」以来半年ぶりの阪妻映画であるから観客は訳もなく殺到して来るであろう」、という。

『清水次郎長伝』は「阪妻映画が、内容主義を捨てて、至極、無色に動いた一つの例。これは、こだはりがなく、たゞ無精に快い」(岡村章「主要日本映画批評」『キネマ旬報』1930年1月21日)と、褒めているのか腐しているのかわからぬ評価ながら、興行価値は、「阪妻の石松、既に大きな価値を持つてゐて、堂々トりに据えられる」と来る。

スターとはかくあるべしということだろうか。

日本映画とりわけ剣戟(チャンバラ)映画と、洋画と、観客層がかなり異なっていたとは、つとに指摘される場所である。

わが尾崎翠も圧倒的に洋画びいきだったが、阪妻だけは別で、欧米のスターと肩を並べて言及した。

尾崎は、映画においては、「眼だけでなく、他の全感官を役者の全身」に向かつてはたらかせる「感覚的観客」が誕生すると述べた。そして「彼の各感官と役者の体躯の部分部分との交錯が始まるのだ。これを表現派の手法で撮つたら、いくらかおもしろい画面になると思ふ」(「映画漫想」『女人芸術』1930年4月)といい、

役者の体躯は彼の中でばらばらに解きほごされ、



『雄呂血』(1925)の阪東妻三郎

集められる。肩・笑ひ・腕・歯・怒り・脚・横向きの肩・胸・スカートの襞・垢の濃淡。——阪東妻三郎は、どうも、すこし、きたなづくりの方が美しいな。薄よごれして、衿垢でもついてた方が

と、書き添えるのである。尾崎は阪妻のどんな作品を観ていたのだろう、『清水次郎長』は観ただろうか。これに先立って、阪東妻三郎プロダクションが募集した懸賞シナリオ募集に尾崎翠は『琉璃玉の耳輪』で応じている。入賞を前提に加筆改稿の依頼があり、やりとりがあったが、結果的に映画化はかなわなかった。男装の女探偵が活躍するシナリオは、近年、津原泰水氏によって小説『琉璃玉の耳輪』として作りかえられている。

阪妻太秦映画「毒眼」の作品評で「原作の狙ひどころがはつきりせず、脚色が途中でかなりの混乱を見せ、監督も都合点などところがないでもなかつたが、その表現派風な演出がともかく一つの魅力となつてこの映画を救つてゐる」(北川冬彦『キネマ旬報』1928年4月1日)というのを読むにつけても、表現派に精通した尾崎の『琉璃玉の耳輪』が映画化されていたなら、と、残念でならぬ。



津原泰水『琉璃玉の耳輪』文庫版(河出文庫、2013)の書影